

# 小田原・箱根地方地場産業における 外材の需要

中 川 重 年

## はじめに

神奈川県西部には広葉樹を使用した伝統的な小木工の地場産業がある。一般にそれらは箱根細工、あるいは箱根物産といわれ広く知られている。この起源は遠く平安期にさかのぼるとされているが<sup>1)</sup>、盛んになったのは東海道の整備、箱根湯治に伴って小田原・箱根地方を訪れる旅人が増加する江戸期からで、旅人、湯治客の手軽な土産物として作られたものである。これらには寄木細工、木象眼、組み木、豆茶器などの小物が多く、現在でもその伝統が続いている。

これら伝統的な品目に加えて昭和20年代からは輸出用サラダボール、テレビ・ステレオのキャビネット類、調味料入れなどのテーブルウェア類、昭和40年代からは合板を使用したファンシーグッズといった新しい時代に対応した商品も生産されるようになってきている。そのうち小物製品は地場での直接販売に加えて、全国の観光地での土産物品として全国的に流通している。これらの生産額は約380企業で、139億円(1988年)となっている。

歴史的には箱根細工に使用される樹種は主として箱根の山地に生育する二次林生の樹種が使われ、そのうちから有色で細工のしやすいものが選ばれた<sup>2)</sup>(表-1)が、現在、神奈川県内からの原木の生産はほとんどなく、関東、東北、北海道などの地方に頼っているのが実情で、商社を通じた外材の購入も多い。

## 原木入手先の変化

原木の供給は古くは地元からの供給で賄ったが、近年になってからは消費量も増加し、原木不足の状況に陥っている。近代百年史—小田原地史(1969年)によると1937年の木材の消費量は、製品石で24,161 m<sup>3</sup>、歩留まりを60%とすると素材で40,268 m<sup>3</sup>であったが、すでにこの時に山梨県の富士山山麓などからヤマハンノキが購入されていることが記されている。

生産のピークは1960年代で、それと共に消費される木材も101,910 m<sup>3</sup>(素材換算, 1961年)であった。この時にはラワン7,500 m<sup>3</sup>(素材換算)が消費されている。そ

---

NAKAGAWA, Shigetoshi: Increase of Imported Timbers in Traditional Wood Crafts of the Odawara-Hakone District in Kanagawa Prefecture  
神奈川県林業試験場

表-1 箱根細工（寄木、豆茶器、組木、木象眼）  
に使われる樹種

樹種	材色	樹種	材色
ミズキ	白	エゴノキ	淡茶
アオハダ	白	ヤマハンノキ	淡茶
タンナサワフタギ	白	キハダ	淡茶
イヌシデ	白	ホオノキ	緑灰
シナノキ	白	サンショウバラ	緑灰
ユクノキ	淡黄	カツラ	茶
マユミ	淡黄	ミズメ	茶
ウルシ	黄	ケンボナシ	茶
ニガキ	黄	ケヤキ	茶
クワ	黄	タブノキ	茶
ヤマハゼ	黄	ネムノキ	茶
チャンチン	赤	イヌエンジュ	茶
モッコク	赤	クロガキ	黒
ウメ	赤	シキミ	黒

注) 一般的に使用されるものと、歴史的に使用された特殊材も含む。

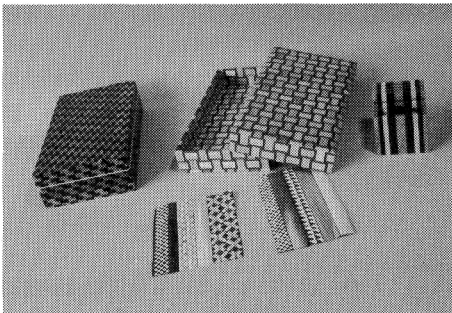


写真-1 神奈川県小田原・箱根地方の伝統的産業である寄木細工。この中にもウォールナットほかの外材が使用されている。

が多い。カット材は直接企業でまとめて購入する場合と、製材業者が購入、販売する場合がある。この方法は現在でも増加しており、最近では外材のカット材も見ることができる。

の後1972年をピークに輸出の衰退と共に漸次減少を続け、第1次オイルショックの年である1973年の資料では木材の消費量も39,261 m<sup>3</sup>（素材換算）であった。その後消費量に大きな変化はなく現在に至っている。

もともとこの地方で消費される木材は国内産の原木については山梨、群馬、岩手県などから原木を購入し、製材所で需要に応じた規格に製材する方式を取っていた。1960年代後半からは人件費の高騰、樹皮などの廃棄物の処理問題、土地価格の高騰、後継者難などの理由から、これまでのような小径材の製材から次のような2つの方向に変化が見ら

れるようになってきた。すなわち、① 歩留まりの良い大径材への変換、② カット材への変換、である。

① でいう大径材は、国産の樹種ではおもにカツラ、ハリギリ、ブナがそれにあたる。外材についてはナトー、ブビンガなどである。② のカット材は国内産の樹種で行われ、おもに福島、山梨などの広葉樹の産地で直接製材してくるもので、規格材については相当数がこの方式となっている。樹種としてはミズキ、サクラ、ブナなど

## 製材方法の変化

使用樹種の変化にしたがい、製材方法に変化が起きた。もともとこの地方で広く行われていた製材方法は、まず、丸太を定寸に玉切り、それから大型の丸鋸で板などに製材するものが多かった。これが大径材導入に伴って、大型の帯鋸で製材した後、丸鋸または小型の帯鋸で細かく板などに製材する方法に変わった。現在では後者の方法をとる企業のほうが多数となっている。この2つを区分する名称はとくにないが、筆者は前者を短一小径材専門、後者を長一大径材専門業者とっており<sup>3)</sup>、両者で特徴が見られる(表-2)。

## 消費量の二ーズ

箱根細工における最近の消費者は図柄や色がはっきりしたものを好む傾向が見られる。そのために生産者側も色の鮮やかな材料を使う傾向がみられ、色のはっきりした

樹種の需要が高くなっている。そのため国産材においてはこのような条件に合致した樹種の常時手配や植林を行うなど業界全体での努力がみられる。しかし国産材の中にはそのような樹種が量的にまともでないなどの悪条件が多く、輸入材の中からこのような条件にあった樹種を求めることも頻繁に行われ、商社を通じて業界に常時新樹種の引合いがされている。

また観光地における土産物ということでは1970年代からは購入層を若い女性に絞ったファンシーグッズ—例えばイラストをシナ合板にスクリーン印刷し、打ち抜きした商品—などが増加している。さらに高級品志向がみられることも特徴である。これまで寄木のブロック—タネ板を薄くスライスしたもの(ズク)を箱などに貼り付けていたものを、タネ板を挽いてムク板にし、これで箱を作ったり、寄木ブロックをロクロで挽いて器を作ることが行われている。これ



写真-2 外材の大径材が置かれている地場産業の製材所

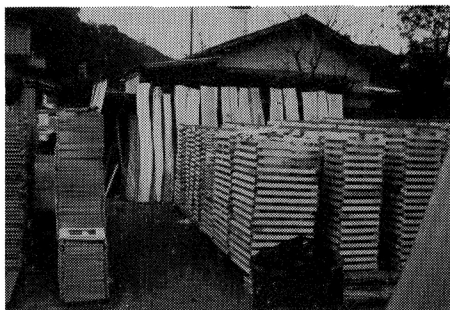


写真-3 材料の天然乾燥場。現在ではこのような素材は原木産地から直接送られてくる。

は1970年代の前半から先駆的に製作されていたが、最近では一般化してきている。

表-2 製材方法による区分

項 目	長一大径材専門	短一小径材専門
樹 種	セン、カツラ、ホオノキ、外材	ミズキ、ニガキ、サクラ
生 産 地	北海道・東北・海外	関東・東北
材 の 長 さ	2.1~5 m	2.1 m 程度
使用する製材機械	帯 鋸	丸 鋸
木 取 り の 順 序	だら挽き (厚さ・幅決め) ↓ 長さ切断	輪切り (長さ決め) ↓ 板割り

表-3 小田原地方で消

樹 種	種 名
コクタン	<i>Diospyros</i> spp.
ナトー	<i>Palaquium</i> spp.
パドック (ナラ)	<i>Pterocarpus indicus</i>
レンガス	<i>Gluta renghas</i>
インディアンローズウッド	<i>Dalbergia latifolia</i>
チーク	<i>Tectona grandis</i>
アルマシガ (アガチス)	<i>Agathis</i> spp.
ラミン	<i>Gonystylus bancanus</i>
ビャクダン	<i>Santalum album</i>
マンソニア	<i>Mansonia altissima</i>
パープルハート**	<i>Copaifera</i> sp.
イエローポプラ (ユリノキ)	<i>Liriodendron tulipifera</i>
レッドオーク	<i>Quercus</i> spp.
ブラックウォールナット	<i>Juglans nigra</i>
オールダー	<i>Alnus rubra</i>
バリサンダー	<i>Dalbergia nigra</i>
ガットンブー (マルフィム)	<i>Balfourodendron riedelianum</i>
アイボリーウッド	<i>Siphonodon celastrinus</i>
チーズウッド	<i>Alstonia scholaris</i>
イエローパイン	<i>Pinus</i> spp.

\* 学名については農林省熱帯農業研究センター編：熱帯の有用樹種 (1978)。

\*\* 心材が赤紫色を示すので、小田原の地元では“ワインウッド”とも呼ばれて

## 外材の導入

以上のことからこの業界は外材に依存する割合が増加しているといえよう。現在使用される外材の種類と用途は表-3のとおりである。この中には定着して使用されているもののほか、一部では試行的に購入され、販売のルートにのっているものもある。

表-3でわかるように現在では20種ほどの外材が使われている。これは1981年に出された寄木細工の実物の見本集である寄木紋様集<sup>4)</sup>では国産樹種33種、外国産樹種9種が使用されていることと比べると、外材の比率が高くなっていることがわかる。

外国産樹種が導入された時期はまちまちであるが、導入された年代で一応の区分を行って見ると、およそ戦前から使用されていたものにコクタン、ローズウッドがあり、1950年代ではアルマンガ（アガチス）、チークなど東南アジアをはじめとする熱帯アジア産の樹種が多い。1970年代からはパドック（ナラ）、レンガス、ナトー、マンソニア、ブラックウォールナット、ガットンブー（マルフィム）などの有色材が使われ、産地もアフリカ、北アメリカ、中南米に広がっている。1980年代からはパープルハ

### 費 用 さ れ て い る 外 材\*

産 地	材色	用 途
熱帯アジア	黒	寄木、箱物、キャビネット
熱帯アジア	濃茶	寄木、箱物、キャビネット
熱帯アジア	薄茶	寄木、箱物、キャビネット
熱帯アジア	赤茶	寄木、キャビネット
熱帯アジア	濃茶	寄木、箱物、キャビネット
熱帯アジア	茶	箱物、キャビネット
東南アジア	薄茶	箱物、キャビネット
東南アジア	薄黄	箱物、キャビネット
東南アジア	薄茶	仏具
アフリカ	黒	寄木、箱物、キャビネット
アフリカ	茶、紫	寄木、箱物、キャビネット
北アメリカ	白	寄木、箱物、家具
北アメリカ	茶	箱物、キャビネット
北アメリカ	茶	寄木、箱物、キャビネット
北アメリカ	茶	寄木、箱物、キャビネット
ブラジル	濃茶	寄木、箱物、キャビネット
ブラジル	薄黄	寄木、箱物、キャビネット
ニューギニア	淡黄	寄木、箱物、キャビネット
ニューギニア	黄	寄木、箱物、キャビネット
北アメリカ	薄黄	寄木、箱物

篠原武夫：東南アジア・オセアニアの林業（1981）を参考にした。  
いる。

ート、パリサンダー、アイボリーウッド、チーズウッドといった樹種が使われるようになり、原産国も中南米、アフリカと世界中から輸入されるようになってきている。比較的高価ではあるが、特徴ある有色材の使用の例としてはパープルハート、パリサンダーといった樹種が使われること、反対に高価になってきた国産のホオノキの代用種として、淡色で箱物用としてイエローポプラ（ユリノキ）が使われ始めている。このほか北アメリカ産で材色が薄茶色のオールダー、イエローパインも現代感覚にマッチするということで使用され始めている。このほかニューギニア、アフリカ産などの樹種が増加していることが特徴である。

## おわりに

小田原・箱根地方の伝統的な木工芸である箱根細工は最近では外材に依存する傾向がますます強くなってきているようである。この地方の年間の消費量を原木換算すればおよそ 40,000 m<sup>3</sup> である。仮に 1 ヘクタールの森林の材積が 100 m<sup>3</sup> であるとすれば、年間 400 ヘクタールの森林から産出される木材に相当する。森林を 50 年伐期で経営すると森林面積、実に 20,000 ヘクタールを確保しなければならない。神奈川県は森林面積はおよそ 98,000 ヘクタール、そのうち約 60,000 ヘクタールが広葉樹林となっており、奥地や制限林を考慮するとこの面積は県内の利用可能な広葉樹林に匹敵する面積となる。このように考えて見ると、一つの業界が必要とする森林は、実に膨大な面積である。したがってこの業界のように輸入材に依存することも当然の帰結かもしれない。しかし地球規模で資源を考えなければならなくなってきた昨今、一方的に世界中の資源を集めることは無条件で許されることではない。なるべく自前で……、この言葉は当り前のことではあるが、われわれには重い言葉である。やるべきことは多いが、まずはわれわれ林業技術者と小田原・箱根地方の小木工業界全体で県内の新たな資源利用開発を進めて、より一層資源の有効利用をすすめて行くことだろう。

おわりに、農林水産省森林総合研究所木材利用部・須川豊伸主任研究官、神奈川県工芸指導所・花崎孝男加工技術科長には樹種の同定ならびに業界の状況などのご意見をいただいた。ここに記してお礼申し上げる。

【参考文献】 1) 箱根物産連合会 (1978): 箱根物産史, pp. 602 2) 中川重年 (1980): 地場産業の振興と未利用広葉樹の利用, 林業技術 No. 458, 14~15 3) 中川重年: 神奈川県小田原・箱根地方における広葉樹製材の実情, 神奈川の林業 (印刷中) 4) 箱根物産伝統工芸産業振興協議会 (1981): 寄木紋様集